Souèges, R. 1937a. Embryogenie de Amaranthacées, Developpement de l'embryon chez l'*Amaranthus retroflexus*. C.R. Acad. Sci. Paris **204**: 892–894. —— 1937b. L'embryon chez les *Amaranthus*. Relations embryologique entre les Solanacées et les Centrospermales. Bull. Soc. France **84**: 242–245. Willis, J.C. 1973. A dictionary of flowering plants and ferns. Cambridge.

*　　*　　*　　*

ヒユの花の胞原細胞は 2-3 層からなり，それが胞子形成組織と側壁細胞層に分化する。側壁細胞層は内皮 (endothecium)，中間層，タペータムに分かれる。後 2 者は花粉形成と共に消失し吸収される。内皮は繊維質になる。タペータムの消失過程はグラニュラル型である。花粉は放出時には 3 細胞からなり8-10個の発芽孔がある。胚珠はカラザの部分までかなりのすきまのある 2 枚の珠皮をもち，珠孔は内珠皮から作られる。珠心の中に 1 個の胚嚢母細胞ができ，その外側の細胞は分裂して多層になる。胚嚢形成はタデ型である。反足細胞は 3 細胞からなるが短命である。受精前の胚珠は半倒生であるが，受精後著しく湾曲して馬蹄形となり，中央に珠心の一部を取り囲む。この珠心の部分は後に外胚乳となる。胚乳形成は多核型である。胚形成はヨハンセンのアカザ型に相当する。以上の花粉，胚乳，胚形成の過程はアカザ科の今までの報告とほぼ一致する。

---

□伊藤浩司・日野間彰（編）：**北海道高等植物目録 I，シダ植物・裸子植物** (Ito, K. & A. Hinoma: Check list of higher plants in Hokkaido I. Pteridophyta. Gymnospermae) 73pp. 1985. たくぎん総合研究所，札幌. ¥2000. 北海道の自生及び栽培植物の目録で，学名とその異名，和名とその異名が載せられ，自生のものには支庁名でその産地が記されている。北海道全体の植物の総目録として便利である。この目録は編者の見解のもとに作られたには違いないが，今後の研究の基礎資料として，今までの主な文献をコンピューターで処理し，それに編者の知見を加えて作られたもので，種の範囲や学名の選択には編者の見解が入るにしても，それは極力おさえられている。北海道は最近でもまだ新植物が発見される状態であり，隣接地域のものとの比較も充分とはいえないので，今後の研究の基礎としての貴重な労作である。コンピューターに入れるのに利用した総合的な文献以外に殆んど個別的な文献がのせてないが，基礎資料ということだし，学名の出典をさがすのに苦労するものもあるので，全部でなくても学名ごとに出典を入れておいてくれるとさらに役立つものとなるであろう。書店にあまり出ないだろうと思うので発行所をあてげおく。たくぎん総合研究所　〒060 札幌市中央区大通西 3 丁目 6 番地 道新ビル。

（山崎　敬）